

新川登亀男編

『仏教』文明の東方移動

——百済弥勒寺西塔の舍利莊嚴——

汲古書院 二〇一三・三刊

A5 二八六頁 八〇〇〇円

本書は二〇一二年七月、早稲田大学において開催された日韓合同シンポジウム「百済弥勒寺西塔の舍利奉安からみた『仏教』文明の東方移動」の成果に基づく論集である。弥勒寺は韓国全羅北道益山市に所在する百済武王時代に創建された寺院であり、二〇〇一年より同寺西院石塔の解体補修と発掘調査が韓国国立文化財研究所により行われた。二〇〇九年一月、石塔一層目の心柱石の上面舍利孔より舍利容器、舍利莊嚴具、更に金製板に一九三の文字が刻まれた舍利奉安記（舍利奉迎記）が出土した。二〇一三年十一月現在、発掘調査報告書は未刊であるが、韓国ではこれら出土遺物に関して既に多数の見解が示されている。同シンポジウムにおいては仏教文明の東方移動を説明するための手掛かりとして、韓国側より西院石塔及び出土遺物に関する調査結果と研究の論点が紹介され、日本側と意見交換がなされた。以下に本書の構成と収録論文を紹介する。

第一部は「百済弥勒寺と舍利莊嚴具の発見」として弥勒寺及び西院石塔・出土遺物・舍利安置に関する四論文を収録する。裴秉宣「弥勒寺石塔の解体修理と舍利莊嚴具の発掘」（鄭淳一訳）は、石

塔の解体から発掘調査、遺物の発掘、及び遺物の状況について報告したものである。崔鉉植「弥勒寺創建の歴史的背景」（橋本繁訳）は、『三国史記』・『三国遺事』等を用いて舍利奉安記の記述を分析し、弥勒寺建立の経緯と意義を考察している。周昞美「弥勒寺址舍利莊嚴具の美術史的意義」（金志虎訳）は、舍利莊嚴具に表された文様や器形、更に製作技法について検討し、百済の舍利莊嚴様式や金属工芸技術について見解を述べる。大橋一章「舍利安置の百済化」は、飛鳥寺の舍利安置に至る仏教文明の伝来について、百済が中国から舍利安置をどのように受容し、変化を加えたかについて論じる。

第二部「舍利奉安記を読む」には舍利奉安記の内容に関する三論文を収録する。瀬間正之「文字表現から観た「弥勒寺金製舍利奉安記」——典拠を中心に——」は舍利奉安記に見られる表現について、その典拠を求めるとともに文章構造にも論及し、舍利奉安記は百済と隋・唐の交流を背景に、六朝の文章を志向して書かれたものであると結論付ける。稲田奈津子「舍利奉安記と日本古代史料」は舍利奉安記を日本古代の文字史料と比較し、韓国で提起された見解にも触れつつ、弥勒寺の創建主体について述べる。更に日本古代の墓誌と形態や埋納状況からの比較も行い、舍利奉安記の史料価値を考察した。新川登亀男「仏教」文明化の過程——身位呼称表記を中心にして——は舍利奉安記に見られる「王后」・「大王陛下」という呼称について、日本古代の文字史料のほか中国史料にも論及しながら、呼称に表れる仏教文明化の過程とその意義について検討している。

また口絵には韓国国立文化財研究所による西院石塔のほか舍利容器・舍利莊嚴具・舍利奉安記とその出土状況を撮影したカラー写真を掲載し、巻末には補記として周昉美「三国時代（高句麗・百濟・新羅）舍利莊嚴具目録」（橋本繁訳）を付す。普段接する機会が決して多くはない韓国の研究動向について、各執筆者とも多く言及しており参考になる。弥勒寺西院の調査結果の全容と主要な論点について知ることのできる有益な論集となっている。

（小宮山嘉浩）